

単語からの連想にあらわれる個々人の「心的現実」

百瀬 肇*1

竹内 健児*2

"Psychic Reality" of An Individual Appearing in the Association With Several Words

Hajime MOMOSE

Kenji TAKEUCHI

Department of Psychology, The University of Tokushima

Abstract

A clinical psychologist must be sensitive to "Words" of a client. Clinical psychologist have to pay attention to a difference of culture and regionality in a background of a client. However, even as for the time between the individuals who took in the same culture in the same area, they give the same meaning contents to a certain word and may not use it. What kind of factor is a gap of a meaning of such a word or an expanse of a meaning born by? It is thought that there is a difference of a method with "the reality that continued" as the state that is not continuous that is "a difference of gestalt of an individual" there. It is thought that gestalt of an individual is formed by "Psychic Reality". There is that I will clarify "Psychic Reality" for the purpose of this study. I thought. When "Psychic Reality" may appear by doing an association to a shown word. Therefore I made "a list of stimulation word" comprising ten words that I could think to be related to a clinical psychology scene. I performed investigation by semi-structured interview for 16 subjects whom I chose among "A University student in Tokushima.

As a result, the way of reaction for stimulation word was distributed between 4 greatly. It is "Experience remembrance - Recollection / Impression reaction" (Er), "Experience remembrance - Concept / Definition reaction (Ec)" "Visual - Image reaction (Vi)" "Visual - Vague reaction (Vv)". I encoded an association with these four types and watched a characteristic every subject. The model of an association of each subject was classified roughly into 3 types. "Experience remembrance model (E model)" "Visual model (V model)" is "Middle model (M model)". Among 3 of these, I examined a typical Experience remembrance model and typical Visual model two examples. And I considered a meaning of an image associated with stimulation word for them and considered a difference of how to get distance from stimulation of the outside world again. In addition, I considered a person of an Experience remembrance model and a Visual model person, a difference of the meaning that a Visual-image for each had. In addition, I examined future clinical application, possibility to, for example, using it as projective test of this study.

Keywords: Psychic Reality, An association, Gestalt, Projective test, Semi-structured interview

1 問題と目的

(1) 単語の意味内容の違い

心理臨床の場面において、心理臨床家はクライアントと言葉のやりとりを行う。クライアントの抱える問題を整理し、要約をしたり、明確化したりして、クライアントとともに問題を考えていくということを行っていく。そのため、心理臨床の場、たとえば面接場面などにおいては、面接者はクライアントの“ことば”に鋭敏である必要がある。面接者がこのことに鈍感であると、クライアントが本当に伝えたいことを受け止め損ねる危険があるからである。

このように相手の発話から相手の言いたいことを正確に受け取ることは望ましいことであるが、心理臨床場面であれ、日常場面であれ、相手の発した言葉の意味を受け損なうことは避けがたいことである。受け損ねを減らすには、受け損ねがありうることを認め、それがどういう要因から生じやすいかを理解する必要があるのではないだろうか。

クライアントがセラピストと異なる言語を母語とする場合に、クライアントが発した言葉の意味の十分な理解が困難になることは想像に難くない。では、同じ言語を母語としていれば受け損なうことがないかといえそうではない。むしろ、同じ言語を話していることを疑わないだけに、受け損ねが生じることもありうる。地域によって、同じ意味内容に異なる単語が当てられていることもあるし、同じ単語を使っている、その意味内容が微妙に異なる場合もあるからである。

たとえば Faust(1998)は次のような例をあげている。

「クライアントと話しながらセラピストは彼らの教育水準、知的能力、人生経験と出生地や住んでいる地域などについても把握しなければならず、またこうした状況に合った言葉づかいをする必要がある。事実、クライアントは自分が使っているのと同じ言葉をつかうセラピストに好ましい反応をする、と報告されている。(中略) [アメリカのある地方で] 『お前のおしりの面倒をみる』という言葉がスパンキングを意味する出身地域の子どもが、面接の中でその言葉をつかった。とくにこの言葉に注意を払うこともせずにさらに話を聞いていくと、思いがけないことに、その子どもは実はこの言い回しを性的虐待を表すのにつかっているという事実が判明したのだった。」 ([] 内は筆者)

このように同じ国内で、同じ英語を使う人々の間であっても、「スパンキング」という言葉がこれだけ違う意味をもってつかわれている。面接者がクライアントの背景にある文化の違いや地域性に十分な注意を払わねばならないという例である。

では、同じ言語を母語とし、同じ地域文化の中にある人が、ある単語に同じ意味内容を付与して使用しているかといえ、必ずしもそうではない。同じ地域に育ち同じ文化を吸収した個人同士であっても、同じ単語を使いながら、意味がずれていると感じることもときにあるからである。

(2) 単語の意味内容の違いを生む要因

では、こうした意味のずれ、あるいはふくらみはどのような要因によって生まれるのだろうか。それをその単語を使う個人や人々の世界観という観点からみてみよう。

もう一度母語の違いの話に戻ろう。我々の母語には我々の世界に対する認識のしかたが反映されているという指摘がある。たとえば丸山(1981)は、虹の例をあげて以下のように述べている。

「我々にとって太陽光線のスペクトルや虹の色が、紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の七色から構成されているという事実ほど、客観的で普遍的な物理的現実に基づいたものはないように思われる。ところが、英語ではこの同じスペクトルを purple, blue, green, yellow, orange, red の六色に区切るし、ローデシアの一言語であるショナ(Shona)語では cips*uka, citema, cisena の三色、ウバンギの一言語であるサンゴ(Sango)語では vuko と bengwbwa の二色、リベリアの一言語であるバッサ(Bassa)語でも、hui と ziza の二色にしか区切らないという事実は何を物語っているのであろうか。言語はまさに、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有な概念化・構造化であって、各言語は一つの世界像であり、それを通して連続の現実を非連続化するプリズムであり、独自のゲシュタルトなのである。」

ここでいうゲシュタルトの違いとは、「連続する現実」を非連続化するやりかたの違いとも言えるだろう。虹の例で考えてみると、虹は本来、紫から赤までの連続体である。それをおのおのの言語では、7つ、6つ、あるいは2つの部分に区切って見ているのである。

各言語において虹がいくつに区切られているかには、その言語を使う人々の世界観が反映されており、同じ言語を用いることでその世界観を共有しているのである。

しかし、同じ言語を母語としている人々の間であっても、同じゲシュタルトを通じて世界を見ているかといえ、必ずしもそうではない。丸山は先ほどの文章に続けて次のように述べている。「さらには同一言語を用いている人々ですら、はたしてどこまで同じプリズム、同じゲシュタルトを通じて現実を見ているか、という問題も残るであろう。ムーナンも指摘しているように、『樹木一般しか知らず、何でも木と呼ぶ都会人は、柏、クマシデ、ブナ、ハンノキ、樺、栗、トネリコを区別して知っている農夫と同じゲシュタルトを通じて世界を見てはいない』からである。」すなわち、人々がどのような地域に住んでいるかによって世界の見方が変わり、それがあある単語の意味合いに違いを生むのである。

さて、すでに述べたように、同じ言語を母語とし、同じ地域文化の中にある人であっても、ある単語に異なる意味内容が付与されるとすれば、それは個人のレベルにおいても、その個人の持つ「ゲシュタルト」の違いが背景にあると考えてみることができそうである。虹に限らず現実世界は連続体であり、それをどう区切り、その区切られたものにどう意味づけするかは、地域差だけでなく、各個人の問題でもあるのである。

では、個々人のゲシュタルトの違いとはいったい何であろうか。ここで『リンゴ』という単語について考えてみる。『リンゴ』と聞いて、ある人が〈赤くて、丸くて、甘酸っぱい味のする食べ物〉と思ったとする。その「赤くて丸い」という部分には、リンゴの実を見たという体験が含まれている。また「甘酸っぱい味のする食べ物」という部分には、リンゴの実を食べたという体験が含まれている。酸っぱいリンゴばかり食べてきた人なら「酸っぱい」と考えるかもしれない。リンゴ農家の人なら、味のことよりも栽培の苦勞のことをまず考えるかも知れない。これは単語の意味が、個人の体験により規定されることを意味する。このように、実体験より想起された考えは、その人にとっての「心的現実」であると言えるだろう。

しかし私たちは「連続した現実」の中で、五感を通して体験したことをもとに考えたり、また、そこからイメージを派生させることもあるだろう。さらには、直接的にも間接的にも見聞したことのない事柄であっても、様々なイメージを持つこともあるだろう。それらは、個々人のファンタジーともいえる。私たちがある単語を聞いて思い浮かぶイメージには、人類全般、あるいは一つの文化圏に共通するものもあるだろうし、個々人に特有のファンタジーを含んだイメージであることもあるだろう。このように、個々人の持つファンタジーをも含んだイメージ、これもやはり、その人が持つ「心的現実」と言えるだろう。先ほどのリンゴの例でいうなら、キリスト教圏に生まれ育った人が「禁断の実」と考えたとしたら、それが、その人の「心的現実」である。ここには一つの文化圏に共通するファンタジーが含まれている。

このように、個々人のゲシュタルトは、その人の実体験、そして、その実体験に基づいたイメージおよびファンタジーに基づいたイメージ、すなわち「心的現実」によって形成されると考えられる。そこで、本研究では、与えられた単語への連想を通して見えてくる個々人の「心的現実」を明らかにしたいと考えた。これにより、心理臨床の場面においてクライアントの語りを聞く際、個々の単語の背景にある“ゲシュタルトの違い”を理解していく、ということの一助になるのではないかと考えたからである。

2 方法

(1) 単語選定の過程

使用する単語を選定するため、心理臨床の場面に関係すると思われる単語をまず 20 個用意した。心理臨床場面に関係する単語にした理由は、まず個人の内面に関することが語られやすいであろうと思われること、もう一点は将来の臨床的応用、たとえば投映法検査として用いることへの可能性を探るためである。20 個の単語をポジティブなイメージまたは中立的なイメージを持つと思われる単語と、ネガティブなイメージを持つと思われる単語に分類し、それぞれを交互に並べたリストを作成した (table1)。これらの単語は、被検者のイメージや思考などを引き出す刺激となるものであるので、以下“刺激語”と呼ぶことにする。

そのリストを用いて、本学臨床心理学専攻の大学院生の二人を対象に予備調査を行った。教示は「私がこれからある言葉を言いますので、あなたに最初に思い浮かんだことをお話ししてください。正しい答えがあるわけではないので、どのようなことを語っていただいても構いません」であった。

(table 1) 予備調査で使った 20 個の刺激語リスト

1 仕事	6 まなざし	11 祈り	16 旅
2 誕生	7 自立	12 甘え	17 夢
3 影	8 悩み	13 薬	18 疑い
4 あこがれ	9 ことば	14 成長	19 風景
5 病気	10 青春	15 暗闇	20 癒し

連想をしてもらった後、「これらの中で言いやすいとか、言いにくいと感じたものはありましたか?」、「ネガティブに感じたものや、ポジティブに感じたものはありましたか?」と尋ねた。その結果、(a)二人とも「言いやすい」と感じたものが〈仕事・旅・夢〉であった。(b)一人が「言いやすい」と感じ、もう一人は「言いにくい」と感じたものが〈影・癒し〉であった。(c)一人が「言いやすい」と感じたものが〈ことば〉であった。(d)一人が「言いにくい」と感じたものが〈あこがれ・悩み・祈り・甘え・疑い・風景〉であった。(e)二人とも「言いにくい」と感じたものが〈誕生・まなざし・成長〉であった。

その中から、(a)の 3 つを導入と最後に使うこととし、評価のわかれる(b)の 2 つ——本研究の趣旨に添うと思われる——と、(c)をリストに入れた。ある程度の分量を語ってもらわないと研究が進まないことも考えられるため、予備面接で被検者 I さんと II さんがともに多く語ったもの (上位 10 番までに入っているもの) 〈病気・暗闇〉を採用し、I さんが多く語ったが、II さんはそれほど多く語っていないものとして〈悩み〉を、II さんが多く語ったが、I さんはそれほど多く語っていないものとして〈青春〉を採用した。以上により、本調査に用いる刺激語として 10 個の単語を選定した。10 個という数は、通常の心理面接とだいたい同じ、一人 1 時間程度でできるという点から決めたものである。また、呈示する刺激語の順序については、被検者の「ネガティブなものが続く」と疲れろ」という意見を参考にして決定した。このようにして作成された 10 個の刺激語リストを table2 に示した。

(table 2) 本調査で使用した 10 個の刺激語リスト

1	仕事	6	病気
2	旅	7	癒し
3	暗闇	8	影
4	青春	9	悩み
5	ことば	10	夢

(2) 調査の対象と実施時期

徳島県内の A 大学生を研究対象とした。対象人数は 16 人（男性 1，女性 15）。被検者は全員，大学 3 回生であり，年齢は 20～22 歳であった。実施時期は，2005 年 10 月 26 日から 12 月 8 日までの期間であった。

(3) 調査の手続き

面接に使用する場所は，基本的には臨床心理相談室の面接室を用いたが，面接室に空がない場合は心理系オープンスペースを使用した。面接構造は，半構造化面接であり，1 対 1 の対面面接であった。

〈連想段階〉

「私がこれからある言葉を言いますので，あなたに最初に思い浮かんだことをお話ししてください。正しい答えがあるわけではないので，どのようなことを語っていただいても構いません」という教示をしたあと，刺激語リストの単語をひとつずつ，table2 の順に，明瞭な発音となるように注意しながら口頭で呈示し，連想を自由に語ってもらった。被検者の発話を促進するような質問は行なったが，被検者の生活世界への積極的な介入をするような質問，たとえば「どういった家族構成ですか？」「現在そのことで困っているようなことがありますか？」等の質問は行わないようにした。記録は，録音機は使用せず，その場でメモを取った。

〈質問段階〉

10 個の刺激語すべてについて連想を語ってもらった後，面接では 10 項目を聞き終わった後で，「言いやすいと感じたもの」「言いにくいと感じたもの」「ポジティブに感じたもの」「ネガティブに感じたもの」，と面接の印象について訊ねた。1 回 60 分を基本として行い，60 分以内で全項目を聞き終わった場合は，その時点で終了とした。

3 結果

(1) 個々の反応の分類

刺激語に対する反応の仕方としては，大きく 2 通りに分けられた。1 つは，刺激語から実体験が想起されるもので，本研究では「体験想起反応」と呼ぶことにした。第 2 に，刺激語を聞いて，写真・映像・絵のようなビジュアル的なイメージを想起するもので，これを本研究では「ビジュアル反応」と呼ぶこととした。

体験想起反応もさらに大きく 2 つに分けられた。1 つは刺激語から過去のことを回想したり，いま感じたことを語るもので，これを回想・感想反応 (Er) とした。もう一方は，刺激語に対する自分なりの定義や概念を語るもので，これを概念・定義反応 (Ec) とした。

ビジュアル反応もまたさらに大きく 2 つに分けられた。1 つはかなりはっきりとした映像イメージが想起されるもので，これを映像反応 (Vi) と呼ぶこととした。一方，視覚的

ではあるが、色彩や光などの漠然としたものを想起する場合もあった。これを漠然反応(Vv)と呼ぶこととした。以上の分類法を(table3)にまとめた。以下に例を挙げる。

(table 3) 個々の反応の分類

<p>・ 体験想起反応</p> <p>体験想起－回想・感想反応 (Er) : 刺激語から過去のことを回想したり、いま感じたことを語るもの。</p> <p>体験想起－概念・定義反応 (Ec) : 自分なりの定義や概念を語るもの。</p> <p>・ ビジュアル反応</p> <p>ビジュアル－映像反応 (Vi) : かなりはっきりとした映像イメージを想起するもの。</p> <p>ビジュアル－漠然反応 (Vv) : 視覚的ではあるが、色彩や光などの漠然としたものを想起するもの。</p>

【体験想起／回想・感想反応の例】 (Er)

〈暗闇〉あの、小さいときに聴いた歌で、メトロポリタンの歌があつて、それと『まっ暗やみの不思議な森』とかいう歌があつて、これは両方ともNHKの“みんなのうた”なんですけど、それが印象に残ったですね。その映像が不気味というか、すごく子ども心には怖くて。これはたぶん、今見ても少し気持ち悪いんじゃないかと思いますね。あと映画館は暗いですね。あと、すごく黒がかった灰色っていう感じ。黒に限りなく近いけど、黒じゃなくてなんか灰色っていう感じ。でもその暗闇になる前の夕方は、空がきれいなんです。オレンジと紺色のグラデーションの空に、ちょっと星が出ている感じ。…… (Hさん)

〈暗闇〉うちの家はすごく古くて、蔵があるんです。小さいときに悪いことをしたら入れられたりしたんですが、その戸がすごく重いんですよ。幼稚園のころなんかだと小さかったから開けられなくて。小学生くらいになったら開けられるようになったんですけど。暗闇ってことばを聞いて、そのときの自分が蔵に入っているときの光景が思い出されました。(Iさん)

【体験想起／概念・定義反応の例】 (Ec)

〈青春〉恋愛、学校。なんか友達と恋愛の話をしているとき「青春やね」って言ったりするので。高校の時のイメージですね。恋愛はやっぱ高校生くらいのことですね。今は青春というよりも落ち着いた感じですね。やっぱ青春っていうのは落ち着いてない感じがす。若々しい感じです。あと制服、高校の時の制服ですね。…… (Lさん)

〈青春〉味わったことのないもの。高校時代に終わるもの。高校の3年間までで、卒業したら終わるという感じ。取り返せないものという感じがします。私は高校の3年間、進学校に行っていて、いつも勉強ばかりする生活だったんです。家も遠かったから、部活もしてなくて、それでなんか冷めてた感じがありますね。…… (Nさん)

【ビジュアル／映像反応の例】 (Vi)

〈ことば〉辞書。国語辞典ですね。それでカバーは小豆色なんです。その辞書が図書館にあつて、向こうの方に茶色のテーブルがあつて、その向こうに窓がある。そのテーブルの上に辞典があつて、それが微妙に開いてて、風で少しめくれている感じです。窓の外は晴れていていい天気、光が入ってきて温かいんですよ。(Aさん)

〈ことば〉日本語ですね。万葉集とか。いまパッと万葉集が浮かびました。なんかカタカナとひらがなが混じってて、古典的な字体で書かれていて。なぜか万葉集なんです。その内容は思い出せませんが。あと新古今とか古今和歌集とかを高校の国語で習いましたね。国語は好きだったんですよ。なんか十二単きて歌を詠んでいる感じですね。一人でサラサラッと詠んでるんです。短冊にサラサラッと筆で書いてるんです。……（Kさん）

【ビジュアル／漠然反応の例】（Vv）

〈夢〉なんかクリーム色な感じです。明るいイメージがあります。夢には希望とかの意味と、寝てみるものの両方がありますね。将来の意味で考えるのは、クリーム色ですね。それはレモン色と白を足したような感じで、あたりが開けるというイメージが出てきました。私はいま大学生で、友達とかは就活をしていて、私は（大学）院に行きたいんですけど、それで勉強会とかにも出てるんですけど、そういうのをしていると、“ああ、夢に近づいてるな”とか思ったりします。でもそういう風に具体的にやってくると結局、夢って何かわからなくなりますね。……（Pさん）

〈夢〉明るい。真っ暗。光。明るいっていうのは、夢はなんか将来っていう感じで、なんか明るい、パーッとした感じです。これはイメージなんですけど、空があって、太陽の光みたいなのがシャーンとしてて。真っ暗っていうのは、寝るときの夢なんですけど、寝るときは私は真っ暗にしてて。怖い話を聞いた後なんかは電気を付けてたりしますが、基本的には部屋を真っ暗にしないと眠れないんですよ。それで真っ暗。光っていうのは、夢と聞いたときに思い浮かぶイメージで、光といってもなんか一直線に強い光が出てくるような感じではなくて、全体的にキラキラ光っている感じです。……（Lさん）

以上の4分類を元に、各被検者のそれぞれ10個の単語についての反応を分類した。ただし、最初に語られる内容が体験想起であっても、語っているうちにビジュアル的なものが語られるようになることがあり、またその逆の場合もあった。たとえば、上記の例でみるなら、Hさん、Lさんの〈暗闇〉の例では、体験想起反応の後、ビジュアル的なものも出てきており、Kさんの〈ことば〉、Pさん、Lさんの〈夢〉の例では、ビジュアル反応の後、体験が出てきている。

また、一つの反応中に二つの要素が語られているとも考えられる場合がある。その場合、主となっている要素を主分類、補助的な要素を副分類とすることとした。たとえばAさんの〈夢〉の例を見てみる。

「虹色。で、青空で、小さい白い雲がもくもく浮かんでいます。……」

この場合、最初に語られている「虹色」は、ビジュアルー漠然反応であるが、後に続く「青空で、小さい白い雲がもくもく浮かんでいます。」を見ると、どうもAさんにはかなりはっきりとした映像イメージがあり、「虹色」は、そのはっきりとしたイメージの中にある漠然としたものであるとも考えられる。そこで、最初に語られた「虹色」はVvとして記号化するが、続く「青空で……浮かんでいます」の部分の方が主となっているものと考えられるため、Viと記号化する。表記のしかたであるが、反応が出た順に表記し、／で区切ることで、(Vv)/Viとして表記することとした。副分類は（ ）で括る。反応数を数えるときは主分類を1、副分類を0.5とすることとした。

(2)被検者の連想型の分類

次に、被検者ごとの特徴を見るため、各刺激語に対する連想のうち、まず最初に語られた反応に注目した。「まず最初にどういふことを思い浮かべるか」ということが、その個人に特有の反応の“型”であろうと考えるからである。上記の分類法に基づいて最初に語られた反応を記号化し、1～10の刺激語のうち、E系(Er, Ec)の反応が70%以上を占めた人を「体験想起型(E型)」, V系(Vi, Vc)の反応が70%以上を占めた人を「ビジュアル型(V型)」, E系の反応, V系の反応がともに70%未満の人を中間型(M)とした。体験想起型(E型)の人は13/16(人)で81.25%であった。ビジュアル型(V型)の人は2/16(人)で12.5%, 中間型(M型)の人は1/16(人)で6.25%であった。各被検者のすべての反応を記号化したものと、各被検者のタイプ(E, V, M型)をtable4に示した。

(table4) 全被験者の反応

	1 仕事	2 旅	3 暗闇	4 青春	5 ことば	6 病氣	7 癒し	8 影	9 悩み	10 夢	型	
Aさん	Vi	(Ec) /Vi	Vi	Vi	(Ec) /Vi	Vi	Vi	Vi	Vi	(Vv) /Vi	V	91.3%
Bさん	Er	Er	Ec	Ec	Er	Er	Ec	Ec/ (Vi)	Er	Ec	E	95.24%
Cさん	Ec	Ec	Ec	Er	Ec	Ec	Ec	Ec	Er	Ec	E	100%
Dさん	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	E	100%
Eさん	Ec	Er	Vi	Vi	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	E	80%
Fさん	Er	Er	Er	Ec	Er	Er	Er	Er	Er	Er	E	100%
Gさん	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	E	100%
Hさん	Ec/ (Er)	Ec/ (Er)	Er	Ec/ (Er)	Ec/ (Er)	Er	Er	Er	Ec	Er/ (Vi)	E	95.65%
Iさん	Er	Er	Er	Er	Ec	Er	Er	Ec	Er/(Ec)	Ec	E	100%
Jさん	Er	Ec	Vi	Ec	Ec	Er	Er	Er	Er	Er	E	90%
Kさん	Ec	Ec	Vi	(Ec) /Vi	(Ec) /Vi	Vi	Vi	Vi	Vi	Vi	V	72.73%
Lさん	Er	Er	Er	Er	Ec	Ec/ (Vi)	Vi	Er	Ec	Vv	E	76.19%
Mさん	Ec	Er	Er	Er	Ec	Er	Vv	Ec	Vv	Ec	E	80%
Nさん	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	E	100%
Oさん	Er	Ec	Ec	Ec	Ec	Ec	Vi	Ec	Ec	Ec	E	90%
Pさん	Ec	Vi	Vv	Ec	Ec	Ec	Er	Vi	Ec	Vv	E 60% M V 40%	

(3) 呈示した単語の特徴

次に本研究の基礎資料として、呈示した 10 個の単語の特徴について、質問段階で尋ねた「言いやすいと感じたもの」「言いにくいと感じたもの」「ポジティブと感じたもの」「ネガティブと感じたもの」の 4 つの質問に対する回答を参考に分析した。「ポジティブと感じたもの」を P, 「ネガティブと感じたもの」を N, 「言いやすいと感じたもの」を a, 「言いにくいと感じたもの」を b, 特にないもの（被検者が、前述の P, N, a, b というようにはっきりとは意識しなかったもの）を c と符号化した。16 人中何人がどう感じたかを百分率で表しながら、内容等も含めてある程度の特徴を見ていくことにする。

- ・〈仕事〉P=18.75%, N=6.25%, a=31.25%, b=12.5%, c=43.75%である。c の割合が最も高いことから、ネガティブやポジティブというよりは、むしろ中立的な印象を与える単語と言えるだろう。a の割合がその次に高い点から、比較的語りやすいものであると言える。3 回生に協力してもらっているため、就職活動や今後の進路のことなどが出やすいようである。また、アルバイトをしている人などは、そのことも出やすいようである。
- ・〈旅〉P=37.5%, N=0%, a=43.75%, b=0%, c=37.5%である。a が最も高く、N, b が 0%であることから、話しやすく、また比較的ポジティブな印象を与える単語であると言えるだろう。また「旅と旅行は違う感じがする」と言った人が 5 人いる。その人たちは「旅行の方がより気楽な感じがする」という点で共通している。
- ・〈暗闇〉P=0%, N=50.0%, a=31.25%, b=25.0%, c=25.0%である。N が最も高く、a が b, c に比べてわずかに高い点から、かなりネガティブな印象を与える単語ではあるが、語りにくくはないと言えるだろう。多く語る人と、あまり語らない人に分かれるようである。「怖い感じ」を想起した人は 9 人、「いやな感じ」を想起した人が 2 人いた。
- ・〈青春〉P=37.5%, N=0%(3.13%), a=31.25%, b=18.75%, c=37.5%である。基本的にはポジティブな印象を与える単語であると言えるだろう。また過去のものとして捉えられている傾向がある。中学校・高校時代、特に高校時代が“青春”という感じがするようである。高校時代についてふれた人は 14 人である。
- ・〈ことば〉P=6.25%, N=0%, a=25.0%, b=25.0%, c=43.75%である。c が他のものよりもかなり高い点から、中立的な印象の単語であると言えるだろう。アルバイトや就職活動の経験から、言葉づかいの問題について語った人が 4 人（アルバイト 1, 就職活動 1）いたが、これは〈仕事〉の内容に影響を受けているのかもしれない。またメールに関する難しさを語った人が 2 人いた。
- ・〈病気〉P=0%(3.13%), N=43.75%, a=12.5%, b=31.25%, c=31.25%である。P についてであるが、1 人が「自分の病気が治ったという体験を思い出し、それで少しポジティブな感じもあるような気がする」と語ったため、それを $0.5/16$ として計算したら 3.13%になるということである。基本的にはネガティブな印象で語りにくい単語であると言えるだろう。被検者の身近な人に大きな病気をした人がいる場合には、病気のイメージがかなり具体的である。
- ・〈癒し〉P=18.75%, N=0%, a=18.75%, b=31.25%, c=31.25%である。N=0 であり、b の相対的な高さから考えると、比較的ポジティブな印象ではあるが、語りにくい単語

であると言えるだろう。漠然としてつかみ所がない印象を与える単語なのかもしれない。“緑”を想起した人が5人いたが、そのうちの2人が（森などの自然物ではなく）“緑そのもの”が浮かぶと語っている。

- ・ 〈影〉 $P=0\%$, $N=50.0\%$, $a=6.25\%$, $b=25.0\%$, $c=31.25\%$ である。Nの高さ、 $b > a$ である点から考えると、かなりネガティブな印象を与える単語であり、またあまり語りやすくはない単語であると言えるだろう。「夕日に照らされてできる人影」を想起した人が5人いた。
- ・ 〈悩み〉 $P=0\%$, $N=31.25\%$, $a=6.25\%$, $b=18.75\%$, $c=56.25\%$ である。cが最も高く、Nがその次に高く、 $P=0$ である点から考えると、中立的であるというよりはややネガティブな印象を与える単語であると言えるだろう。ただし〈暗闇〉や〈影〉ほどはっきりしたネガティブ傾向が出ないようである。「将来の自身の進路」について語っている人が5人いる。これは〈仕事〉で語られた内容と似通っている。これ以外でも前述の8つの単語で語られた内容と類似しているものがみられる。これは〈悩み〉という語が他の単語に比べて直接的な印象を与えていて、それが被検者を防衛的にしてしまっているためかもしれない。
- ・ 〈夢〉 $P=37.5\%$, $N=0\%$, $a=31.25\%$, $b=0\%$, $c=31.25\%$ である。P, aの高さから、かなりポジティブで語りやすい印象を与える単語であると言えるだろう。“夜みるもの”と、“将来の目標”に近い意味の両方を語った人が10人。そのうち“夜みるもの”の内容について語った人が7人である。“将来の目標”に近い意味で語られる場合、〈仕事〉で語られる内容と類似しているようである。

また、各単語におけるV系の占める割合（ $=V\%$ ）を見てみると、〈仕事〉6.06%、〈旅〉11.76%、〈暗闇〉31.25%、〈青春〉17.65%、〈ことば〉11.43%、〈病気〉15.15%、〈癒し〉31.25%、〈影〉21.21%、〈悩み〉18.18%、〈夢〉29.41%、となっている。この10単語のうちでは、〈暗闇〉〈癒し〉〈夢〉が、比較的ビジュアル的イメージを想起しやすい単語であるといえる。

4 考察

(1) 体験想起型とビジュアル型のもつ意味

本研究では、被検者が連想の仕方によって体験想起型とビジュアル型に分類された。それぞれにはどのような特徴があるのだろうか。

今回行った結果では、体験想起型の人が大勢を占めているわけであるが、前にも述べたように、最初に語られる内容が体験想起であっても、語っているうちにビジュアル的なものが出てくることがある。体験想起型といっても、まったくビジュアル的なものと無縁ではないのである。つまり、もののとらえ方・考え方という視点に立つと、体験想起型の人には外部からの言語刺激に対して、まず自身の体験を思いだし、それをもとにイメージをふくらませ、考えを発展させていくというやり方で情報処理をしている人であり、ビジュアル型の人には外部からの言語刺激に対して、まず映像を思い浮かべ、それをもとにイメージをふくらませ、考えを発展させていくというやり方で情報処理をしている人であるといえるだろう。ただしビジュアル型の人のも思い浮かべるイメージは、実体験に基づくものであ

ることもあるが、実体験に基づかない、あるいは基づいているかもしれないがよくわからないもの——一種のファンタジーとも言えるかもしれない——もある。同じ刺激語を聞いても、体験想起型の人とビジュアル型の人では、情報処理のしかたからしてかなり異なっていると言えるだろう。

(2) 連想の背景にある「心的現実」～二つの事例から

ここで「心的現実」という語について定義しておく必要があると思われる。Freud(1917)はこれに関して以下のように述べている。

「分析によって構成あるいは想起された体験は、ある時は明らかに虚偽であるが、ある場合には確実に正しいものであり、たいていの場合には真偽が混淆しているというのが事態の真相なのです。…(中略)…心的産物もまた一種の現実性をもっています。患者がこのような空想を作り出したということは、あくまで一つの事実であり、この事実は、患者の神経症にとっては患者がこの空想内容を実際に体験した場合にも劣らない重要な意味をもっているのです。これらの空想は物的現実性とは反対に心的現実性をもっているのです。」

本研究でもこのFreudの考え方を踏まえ、「心的現実とは、空想や自分独自の考え方などを含んでいて、他者には了解されえないかもしれないが、その本人にとっては紛れもない現実である」と定義することにする。ただし本研究の趣旨は、1. 問題と目的でも述べた通り、個人のゲシュタルトの違い、つまり「連続する現実」を非連続化するやりかたの違いをみることである。そこでさらに次のことも付加しておく必要がある。「その人がある事柄を考えると、世界という連続体からどのように意味を切り取っているのか。個々人による意味の切り取り方の違いも心的現実の1つである。」

上記の定義に従って、典型的な体験想起型のHさんと、典型的なビジュアル型のAさんの例を見ていくことにする。それぞれの刺激語に対する語りについては、被検者のプライバシーを侵害するおそれがあるので、一部のみをそのまま記載し、語りの残りの部分は要約して示した。冒頭部分の体験想起反応(E)、ビジュアル反応(V)を決定するのに使用した箇所については、ほぼ逐語録のまま記載した。また、刺激語に対して被検者が語った内容を記号化したものを「反応」と呼ぶこととし、その語りを記号化した結果を末尾につけた。例えば上記の、Hさんの〈暗闇〉についての語りには、 $Er_1 \rightarrow Ec_1 \rightarrow (V_v)/V_i$ という記号化がなされているが、これは語りが内容的にそのような変化を辿ったという意味である。また $Ec \rightarrow Er_1 \rightarrow Er_2$ のように同じ記号が続く場合がある。これは記号は同じであるが内容は変化しているためである。例えば同じErであっても「ペットのこと」と「受験のこと」のように内容が変化している場合にこのような記号化を行ない、数字をつけて区別して表記した。そしてどの反応をどのように記号化しているかを表すため、それぞれ主分類Erを__, Ecを__, Viを____, Vvを____の下線で区別した。筆者が行った質問は〈〉で示した。

【事例1～体験想起型のHさん】

1 仕事

やっぱり就職難ですかね。自分がどんな仕事に就くかということを考えます。やっぱり就職して仕事をしたいとか…、年齢的な問題も考えます。…… (この後、親が同じ仕事を

何年も続けられたこと、今後の進路、院への進学について——就職面や経済的な面での心配など——のことが語られる。）

《Ec/(Er)→Er1→Er2》

2 旅

今からの時期だと、卒業旅行ですね。それでお金をどう工面するか考えてます。卒業旅行は自分のお金で行きたいから。あと部活で、試合とかでいろんな所に行きますね。それがちょっとした旅になってるかな、と思います。……（この後、旅行好きの友人のこと、他県に行っている妹についてのことが語られる。）

《Ec/(Er)→Er1→Er2→Er3》

3 暗闇

あの、小さいときに聴いた歌で、メトロポリタンの歌があつて、それと『まつ暗やみの不思議な森』とかいう歌があつて、これは両方ともNHKの“みんなのうた”なんですけど、それが印象に残ったですね。その映像が不気味というか、すごく子ども心には怖くて。これはたぶん、今見ても少し気持ち悪いんじゃないかと思いますね。あと映画館は暗いですね。あと、すごく黒がかった灰色っていう感じ。黒に限りなく近いけど、黒じゃなくてなんか灰色っていう感じ。でも、その暗闇になる前の夕方は、空がきれいなんです。オレンジと紺色のグラデーションの空に、ちょっと星が出ている感じ。あと、日の長さが変わるイメージですね。すぐ暗くなったりして、なんかもの悲しくなったりする。（この後、犬小屋のこと、飼っているハムスターが夜中に音をたてること、実家で夜、ゴキブリを見たことなどが語られる。）

《Er1→Ec1→(Vv)/Vi→Er2→Ec2/(Vi)→Er3→Ec3→Er4→Er5》

4 青春

終わってみて気付くもの。たぶん私にも青春といわれる時期があつて、いま思うとあれがそうだったのかな、と。その青春の最中はいつもと変わらない日常生活を送ってるだけの平凡な毎日。そのとき着ていたセーラー服のイメージもあります。中学校・高校の時のイメージですね。制服が青春を表しているような感じですね。中学校・高校ともセーラー服だったので、そのイメージが強いです。あと、高校の時の校舎ですね。高校の建物自体が浮かびます。（この後、通っていた高校の様子——陣屋跡に建っていて堀に囲まれている、秋祭りのころになると高校の側にだんじりが集まったり、屋台が並んだりするということなど——や、高校野球が強い高校ならではのエピソード、高校の同級生が事故で亡くなったことなどが語られる）

《Ec/(Er)→Vi1→(Ec)/Er1→(Ec)/Vi2→Er2→Er3→Er4》

5 ことば

なんか国語とか英語とか、語学力の科目のことが。あと地方弁。方言ですね。そんなのが浮かびます。大学は全国から人が来てるから、いろんな方言があつて面白いなど。今はだいぶ抜けたけど、前はもっと地元の言葉が出てました。今はいろんな所の人と接してる

から、いろんな言葉が混じるようになって。（この後、大学のあるA県の方言についての感想、四文字熟語などの穴あき問題などが好きなこと、ものの言い方の違いでよい印象を与えたり、逆に怒らせたりするということが、言い回しの下手な人についてのことが語られる。）

《Ec1/(Er)→Er1→Ec2/(Er)→Ec3→Er2》

6 病気

私、小さいとき扁桃腺が大きくて、それで週に2〜3日風邪ひくくらいすごかったんです。その扁桃腺があまりにひどくて、いつものどが痛いし、鼻づまりは治らないし、（その後、扁桃腺を取るために手術をしたこと、それにより病気をしなくなったこと、その手術の前に祖父母が亡くなったこと、それから数年後、朝起きたら両親がいなくて、それは父が緊急入院したためであったことなどが語られる。）

《Er1→Er2→Ec1/(Er)→Ec2→(Ec)/Er3》

7 癒し

ハムスター飼ってるんですが、ハムスター見てたら癒されます。……あと、実家帰ったら、うちの中でいるだけで幸せな感じ。ものを食べてるときとか、寝てるときとか、自分の好きなことをしてるときは、癒されるなって思う。（この後、キノコの本を見るのが好きなこと、キノコに関する思い出が語られる。）

《Er1→Er2→Ec1/(Er)→Ec2→(Ec)/Er3》

8 影

あの…、「影…なんとか」。自分の影をずっと見てて、上を見たらその影が空に映って見えるっていうの。〈ちいちゃんの影おくり?〉それです。「ちいちゃんの影おくり」の歌があって、実際にやってみたりしました。あと自分の影。日の長さによって変わっていく感じ。夕方とか自分の影を見ると、こんなに影が長い。「こんなに足が長かったらモデルだ」なんて想像しながら遊んでみたりしましたね。中学校とか高校の朝礼の時なんかはハトがいて、そのハトが体育館に入ってきたりして、梁に止まるんですよ。その下にいるといろいろ落ちてくるので、その下だけ人がよけてて、そこにハトの影だけぽつりと映るんですよ。あと、印象の薄い人のことを「影が薄い」とか言いますよね。そういう言葉も出てきます。

《Er1→Ec/(Er)→Er2/Vi→Ec》

9 悩み

やっぱり将来についてですかね。どうなるのかな、とか。あと、今飼ってるハムスターがもう少しで寿命なんで、死んでしまったらどこに埋めようかとか。…（中略）…そのあともう一匹飼うかとか考えたりします。あと思い出するのが大学受験とかの悩みですね。あのときは追いつめられてたというか、張りつめてた感じですね。（この後、大学の推薦入試を受けたときのこと、蒸しパンや布団、クッションなどの柔らかいものが好きなこと、動物が好きで触りたいこと、球根に触りたいこと、部屋の本棚が壊れていること、片づけ

をしてもすぐ散らかること、自分はあまり悩みを抱えこむタイプではないこと、などが語られる。)

《Ec→Er1→Er2→Er3→Er4→Er5→Er6→Er7》

10 夢

私にとって一番印象的な夢は、(この後、夜みる方の夢について、上半身と下半身の切られた人の出てくる夢、役に立たない魔法が使える夢、地震の時に見た夢、ハムスターの出てくる夢、逃げる夢、寝言のことなどが語られる。また「将来に関するもの」としての夢では、持ちたい家庭像、自分の発想の仕方について、「夢」と聞くとピンク色みみたいな明るい感じがするということが語られる。)

《Er1/(Vi)→Ec1/(Vi)→Er2→Er3/(Vi)→(Er)/Vi→Er4→Er5→Er6→Er7→(Vv)/Ec》

【量的分析】

1~10の刺激語に対してのHさんの語りを記号化したものの数、つまり全反応数は65であり、そのうちEr=43(63.24%), Ec=17.5(25.74%), Vi=6.5(9.56%), Vv=1(1.47%)であった。

【Hさんの心的現実】

本研究では単語を外的刺激として用い、自由に連想をしてもらった。そして、ここでのHさんは、外的刺激に対してどのように対処していくのか。刺激語をHさんはどのように意味づけているのかということを見ていくことにした。意味づけとは、本研究での視点では、4 考察-(2)でも定義した通り、世界という連続体からどのように意味を切り取っているのかということである。個々人が世界をどのように切り取っているか、それが意味づけ方の違いとして現れるのではないかと考えたのである。

そこでまず、1 問題と目的-(2)で述べた、個々人の持つゲシュタルトという観点から考えていくことにする。ここからうかがえるHさんのゲシュタルトとはどういうものであろうか。それは典型的なE型でErが70.77%と中心的な部分を占めていることからわかるとおり、体験、それもかなり具体的でリアルな体験の連続体であると考えられる。例を見ていくと、〈仕事〉では現在直面し、不安を感じている就職や進学に関することが語られている。そのように現在直面することを主に語っている例は、〈旅〉〈悩み〉でも見受けられる。また〈青春〉では過去の体験が鮮明に語られている。そのような例は〈暗闇〉〈病気〉〈悩み〉〈夢〉でも見られる。つまりHさんは、外部からの刺激を処理していく際に、かなりリアルな体験を想起し、それを用いて自分なりの意味づけを行っている人と言えるだろう。これは、同じ典型的なE型のNさんの〈仕事〉の冒頭、「今やらなきゃいけないこと、絶対しなきゃいけないことですね。……」と比較しても、かなりリアルな体験を想起していることがうかがわれる。

ここで、外的刺激との距離のとり方という観点から考えてみる。そうするとHさんの視点は、現在または過去の自分自身の体験の中にある、と言えるのではないだろうか。刺激語により想起されたものを、少し離れた位置から見ているのではなく、想起した体験の現場にHさんがいるという視点である。この違いを外的刺激を受けたときの対処という点から考えるならば、Hさんは外的刺激を処理していく過程の中にHさん自身がいるために、よ

り外的刺激を強く感じている可能性がある。自分に起こる思考や感情も、より主観的になる傾向があるかもしれない。しかし現実社会で生きるかぎり、著しく主観的な考え方をし続けていくわけにはいかない。そのためHさんは、思考の過程でV系のイメージを差し挟んでいくことで、著しく主観的にならないようにバランスを取っているのではないかと考えられる。つまりV系イメージを、客観的な方にバランスを取るための道具として用いていると考えられるのである。

HさんがV系の事柄を語るときは、ネガティブでもなく、ポジティブでもなく中立的な内容であるように感じられた。そして、事物から距離を取って冷静に見ている態度もうかがえた。基本的には体験想起反応をするHさんであるが、ネガティブになりがちなきななどに、無意識的にビジュアル的なものを想起し、心のバランスを取ろうとしているのではないかと考えられる。

【事例2～典型的なビジュアル型のAさんの例】

1 仕事

イメージとしてはスーツを着てピシッと決めた女の人。たとえばフライトアテンダントみたいなのが浮かんでくるけど、それがあこがれ。仕事がちゃんとできる人ですね。自分1人の力で何でもできる、自立した人があこがれ。そんな感じですね。

《Vi→Ec》

2 旅

一人旅。なんかこう田舎で、電車に乗って時間とかを気にせずに行く感じ。〈田舎の風景ですか？〉電車の窓があって、そこから向こうに大きな山があって、ちょっとだけ家があって、田んぼが広がっている感じです。農村のような何もない感じの風景が浮かびます。

(この後、この風景は実際に行ったり見たりしたものではないこと、テレビで見た沖縄より南にある小さな島に一人旅をしたいということが語られる)

《(Ec)/Vi→Er→Er/(Vi)》

3 暗闇

真っ暗なトンネルみたいな感じですね。普通のトンネルは向こうの出口が見えるんですけど、そのトンネルは向こうが見えない感じです。真っ暗で、なんか空気も暗い感じなんですよ。なんか重苦しい感じで、身体が重苦しいというよりも心に重苦しいというか、ズンとくる感じ。(これは小学生のころ見た心霊関係のテレビ番組や、母が車に乗っているときそのことを言ったりされたという体験が語られる)……次に浮かんだのは、何もない空間ですね。空気がどんよりしてて、そこに人がうずくまっている感じです。その人は女の子で、ポニーテールで15～6歳です。で、少なくとも自分ではない。その子は手足が長くて色が白いんですよ。それで、膝を抱えてうずくまっているみたい。でも怖い感じはしない。この女の子はきっとつらいことがあったんです。

《(Ec)/Vi→Er→Vi》

4 青春

セーラー服ですね。あと桜。楽しそうな入学式ですね。卒業式かな？〈いつの？〉たぶん中学生ですね。中学の卒業式。で、空は青いんですよ。青空が広がってて、場所は学校のグラウンドで、その端の方に桜が植わっていて。〈セーラー服を着た人はどんな感じ？〉自分ではないです。で、季節は春なのに、なぜかセーラー服は夏服なんです。そのセーラー服はなぜか私が高校の時の制服なんです。

《Vi》

5 ことば

辞書。国語辞典ですね。それでカバーは小豆色なんです。その辞書が図書館にあって、向こうの方に茶色のテーブルがあって、その向こうに窓がある。そのテーブルの上に辞典があって、それが微妙に開いてて、風で少しめくれている感じです。窓の外は晴れていい天気です。光が入ってきて温かいんですよ。窓から見える景色は大学の図書館に近いような気がするけど、でも全く同じではないです。どっちかという地元の図書館のイメージなんです。最初はズームで辞書だけが見えてて、それがだんだんズームアウトしていったんだんだん遠景になっていく感じがします。

《(Ec)/Vi→Vi》

6 病気

病院でベッドがあって、患者が寝ていて、その横で看護師さんが点滴を取り替えてるんです。なぜか点滴は奥の方にあるのに、看護師さんは手前の方から患者さんの上で手を伸ばして取り替えてるんです。その看護師さんは女性で、後ろで髪をくくってるんです。で、ナース服はパンツなんです。（この後、患者は祖父であるらしいこと、最近祖父が入院し、看病をした経験があることが語られる）

《Vi→Er》

7 癒し

癒し…。何だろ…。イメージとしては緑。濃くなくて、薄めの黄緑色です。〈色そのものが浮かぶ？〉はい、グリーンアップルみたいな色。あと、いやし系タレントで〇〇ちゃん（女性タレント）が、好きなんです。かわいいと思うんですよ。他のいやし系の人では別に癒されないんですよ。男の人では全然だめで、〇〇ちゃんは特別ですね。

《Vi→(Vi)/Er》

8 影

夕方、たぶん子どもが立ってて、向こうに夕日があって、子どもの影がこう、長く伸びている感じ。そこは舗装されてない土の道なんです。田舎っぽい感じなんです。性別はよくわからないけど子どもが1人そこを歩いてて、たぶん家に帰っている途中で、長い影ができています。〈周囲はオレンジ色に染まってるんですかね？〉はい、その子どもの周りには田畑が広がってて、カラスも飛んでいます。そして山が向こうの方に、農村っぽいですね。

《Vi》

9 悩み

…、悩み…。悩みって聞いたらこう、あごに手（こぶし）をたてている感じですね。人が悩んでいるのを横から見ている感じですね。〈自分が？〉はい、その人は全く知らない人で、女の人です。『暗闇』のときに出てきた人ではないけど、ああいう人です。やっぱり周りは暗くて、私とはちょっと距離があります。その子は窓の縁で肘をついて悩んでいるのを、私が外から見ている感じです。〈どこなんだろうね？〉学校の建物で、周りが見えないけど、なぜか学校のような感じがします。そこはかなり暗くて何も見えない。でもその女の子だけ、肌が白いせいか、光っているわけでもないのに、なぜかよくわかるんですよ。その子は建物の中にいて、私が外から見ているから、その子の上半身しか見えないんです。

《Vi》

10 夢

虹色。で、青空で、小さい白い雲がもくもく浮かんでいます。私の姿はそこにはないんですが、それは私が空を飛んで自分が見てる感じだからなんですよ。私はかなり高いところを飛んでいます。空に天井があるわけではないんですが、空のいちばん上の外の所はもう何もない空間で、私はその空のいちばん上の何もない空間ぎりぎりの所を飛んでいるんです。つつい飛んでいるんですが、下手したら空の天井にぶつかるかなー、って感じです。そして赤い風船も飛んでいます。（この後、この風景の空は小学校低学年のころに描いた読書感想画に似た感じのものであること、その絵で何か賞をもらったこと、その空はたぶん秋であること、運動会をしたらよいような天気であること、わくわくするような感じであること、などが語られる）

《(Vv)/Vi1→Vi2→(Er)/Vi3→Vi/(Er)》

【量的分析】

1～10 の刺激語に対してのAさんの全反応数は 25 であり、そのうち Er=6(24.0%)、Ec=2.5(10.0%)、Vi=15(60.0%)、Vv=1(6.0%)であった。

【Aさんの心的現実】

まず、Aさんの持つゲシュタルトという観点から考えていく。Aさんは典型的なV型である。〈癒し〉以外では、全てでかなりはっきりとした映像を見ているようである。〈仕事〉ではフライトアテンダントみたいな女の人のことイメージし、それは自立した女性像であると語る。また〈旅〉では電車の窓から見る農村の風景をイメージし、南の島に一人旅をしたいと語る。この下線の部分は、Aさんの配慮、つまり筆者にもわかるように“翻訳”をしているのではないかとと思われる。それは面接に慣れてきた〈暗闇〉以降では、そのような翻訳がほとんどないことからの推測である。実際に筆者は、〈暗闇〉以降でAさんの語っていることが意味するものをつかみかねている点がある。Aさんはおそらく、ゲシュタルトとして映像の連続体を持っている。そして刺激語に対しても、映像で連想を広げているものと考えられる。〈暗闇〉ではトンネル→ポニーテールの女の子、というよう

な例が見られる。ただし、このことはAさんが奇妙であることを意味しない。日常生活では、自分のイメージを“翻訳”してコミュニケーションを行っているであろうからである。またAさんの持つイメージにはある程度の傾向も見受けられる。例えば、〈暗闇〉〈悩み〉で出てくる色白の少女についてであるが、“何か悩んでいる”状態を象徴するものは、色白の少女が一人で暗いところにいるというイメージで共通している。また〈旅〉〈影〉で出てくる農村の風景であるが、これは“一人”の状態の象徴のような感じである。また“ポジティブな感じ”を象徴するものとして『青空』を指摘できるかもしれない。おそらくAさんなりにある程度の法則性があり、それに従った“翻訳”を日常的に行いながら生活しているのであると考えられるのである。

ここで、外的刺激との距離のとり方という観点から考えてみる。Aさんが語った内容で、〈暗闇〉〈悩み〉に出てくる少女は「自分ではない」という。この視点は全部の連想に共通している。つまり自分は、想起されるイメージを少し離れたところから見ている、という視点である。このことは“翻訳”の作業ともかかわってくることはないかと推測できるだろう。刺激語に対して想起される映像イメージが存在し、かつ同時に少し離れたところから、それらを“翻訳”すべく観察をしているAさん自身が存在しているために、想起されるイメージを少し離れたところから見ている、という視点が生まれるのかもしれない。Aさんをのみならず、ビジュアル型の人には現実社会でいるかぎり、“翻訳”をせずに、純粋に映像イメージのみによる思考をできる時間は少なく、むしろかなり多くの時間“翻訳”をし続けているのではないかと考えられる。また、Aさんは外的刺激を処理していく段階で“翻訳”の作業が入るため、客観的に自分に起こる思考や感情を見ていくことになるのではないかと考えられる。

(3) 外的刺激との距離のとり方とV系イメージについて

ビジュアル型のAさんの場合、刺激語から想起される映像イメージを少し離れたところから“翻訳”すべく観察をしている自分が存在している、と先に指摘した。本研究ではビジュアル型の人には全体の12.5%と、少数派である。もっと多くのデータを取った場合、どのように増減するかはわからないが、ここではビジュアル型が少数派として考えていくことにする。現実社会でいるかぎり、ビジュアル型の人には純粋に映像イメージのみによる思考ができる時間は少ないだろうと想像できる。現実社会ではコミュニケーションを行う必要がある。周囲の人たちが体験想起型の人である場合、その人たちに対して自分の思考を“翻訳”して伝えていく必要が生じるからである。たとえ周りの人がビジュアル型であったとしても、それぞれの持つイメージの意味が一致するとは限らないからである。そこでやはり、“翻訳”の作業が必要になるであろう。そこで、どうしてもかなり多くの時間、自分の思考を“翻訳”をし続けるということになると考えられる。ビジュアル型の人には、この“翻訳”の作業が入るために、客観的に自分に起こる思考や感情を見ていくことになるのではないかと考えられる。

体験想起型のHさんの場合、外的刺激を処理していく過程の中にHさん自身がいるために、より主観的になる傾向があるかもしれないと、先に指摘した。これは体験想起型の人の特徴であるかもしれない。しかし現実社会で生きているかぎりには、あまりにも主観的な考え方を続けていくことはできないだろう。著しく主観的な態度は、他者から見れば

わがまま、自己中心的に見えるだろうし、さらには、社会不適応とも取られかねないからである。そこであまりにも主観的になりすぎそうになったとき、Hさんの場合は、思考の過程でV系のイメージを差し挟んでいるのではないかと考えられる。

これらのことから、ビジュアル型、体験想起型それぞれにとって、V系イメージの持つ意味が異なるということが指摘できるだろう。ビジュアル型の人にとってのV系イメージは思考そのものであり、体験想起型の人にとってのV系イメージは、客観的な方にバランスをとるための道具である、と考えられるのである。また体験想起型の方は、自分の思考に客観性を持たせるためにV系イメージだけでなく、Ecも利用している可能性がある。Ecは体験そのものではなく、体験がある程度整理された概念である。Ecを用いることで、外的刺激を受けて自分の中に起こる思考や感情と、ある程度の距離を作っているのではないかと考えられるのである。

(4) 今回の研究の問題点と今後の課題

本研究では、個々人の「心的現実」、言い換えれば「個々人が、現実世界という連続体を理解するために、どのようなゲシュタルトを用いているか——つまりどう世界を切り取っているのか」を見ることを目的として、刺激語からの連想を用いた。

本研究の結果には、筆者の研究前の予想を大きく超えていることがあった。それはビジュアル型の人がいた、ということである。体験想起型のイメージの範囲内で、非現実的ファンタジーを語る人などがいるのではないかと考えていたのである。おそらく体験想起型である筆者にとって、ビジュアル型の方のイメージをどう考えていくか、ということはかなり難問であり、本研究は、ビジュアル型の方の「心的現実」をどう考えていくかということに終始してしまったのではないかと感じている。

また先ほども述べたとおり、本研究の目的は、個々人がどう世界を切り取って見ているかを考えることが目的であったため、刺激語を提示する〈連想段階〉でも〈質問段階〉でも被検者の生活世界への積極的な介入をするような質問は行わなかった。ただ、将来の臨床応用、すなわち単語から連想したことを自由に語る形式の投映法検査として用いることへの可能性を探る、という面について考えるならば、〈質問段階〉での質問内容を具体化していく必要があるだろうし、被検者が何度も繰り返している事柄はもっと詳しく聞いていくことなどについても検討すべきであろう。

また、今回の被検者は、本研究に協力しようという意識の高い人たちばかりであったので、どの人もかなり多くのことを語ってくれたが、実際の臨床場面では、非常に口数の少ないクライアントもいる。そういう人たちに、本研究で用いた検査がどの程度応用できるのかについても今後検討すべき課題である。また、今回の被検者は大学3年生であったので、今後はより年齢の高い人、あるいは低い人に対して行ってみる必要がある。

また、筆者の印象であるが、この検査は刺激語を提示する順序も、被検者の連想に大きな影響を与えているようである。もし10番目に提示した〈夢〉を冒頭に持ってきたら、また想起されるものは異なったであろうと思われる。この刺激語提示の順番の妥当性の検証も、今後の課題である。

最後に分析法として、ロールシャッハ・テストやTATで用いる継起分析の手法を応用して、被検者の心理査定をするということは可能かもしれない。ただ、その場合、ビジュ

アル型の人被検者であった場合には、質問段階で被検者自身にある程度の“翻訳”を行ってもらっておかないと、継起分析の手法は使えない可能性もある。独自の継起分析の手法を考える必要はあるだろう。

【注】

* 1 医療法人あいざと会 藍里病院／徳島大学大学院人間・自然環境研究科臨床心理相談室 The Medical Corporation Aizato Society, Aizato Hospital／Clinical Psychology Counseling Service at Graduate School of Human and Nature Environment Sciences, The University of Tokushima

* 2 徳島大学総合科学部 Faculty of Intergrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

【引用文献】

ファウスト J, 上月恵理(訳) 2001 第 1 章 臨床面接全般に関する問題点 ハーセン M, &ハッセル V. B. V, 深澤道子(監訳) 臨床面接のすすめ方 初心者のための 13 章 日本評論社 (Faust, J. 1998 General Issues Hersen, M. Hasselt, V. B. V. Basic Interviewing : A Practical Guide for Counselors and Clinicians Lawrence Erlbaum Associates Inc.)

フロイト S, 高橋義孝, 下坂幸三(訳) 1977 精神分析入門(下) 新潮社 (Freud, S. 1916-1917 Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse Imago Publishing, London 1940)

丸山圭三郎 1981 ソシユールの思想 岩波書店

(2006 年 10 月 6 日受理)